

① 球史に輝く大投手

「嶋投手、ぐるぐるつとワインドアップ……」

連日ラジオの電波に乗って聞こえてくるアナウンサーの名調子とともに、

嶋清一しまきよかずは全国にその名を

広め、永く球史に残ることとなった。
昭和十四年（一九三九）夏の甲子園、全国中等学校野球選手権大会のことである。

甲子園球場では、八月十三日から、連日の暑さをものともせず、全国の精鋭二十二チームによって、熱戦が展開された。海草中学校は、大会二日目、台湾代表の嘉義かぎ中学校と対戦。二回戦は、京都府代表の京都商業との対戦であったが快勝した。

三回戦は、山陰代表の米子中学校との対戦。嶋の好投とチームワークの良さで米子中学校を無得点に封じた。

その翌日の十九日には、静岡代表の島田商業との準決勝戦であった。一回の裏に海草中学校は、多彩に攻めて一挙に四点を取り機先を制した。その後、猛打を浴びせて三回に一点、七回に三点を加え、8対0の大差で圧勝した。この対戦で嶋は快腕にもの



をいわせ、相手をノーヒット・ノーランに打ち取り、三振実に十七という快記録を打ち立てた。

明けて八月二十日は、いよいよ待望久しかった決勝戦であった。海草中学校のナインは、連日健闘の疲れをもとせせず、主将の嶋投手を中心に必勝を期して決勝戦に臨んだ。相手は名高い下関商業である。

故郷の和歌山の応援団も和歌浦から船を仕立てて海路甲子園球場まで応援に駆けつけてくれたファンも多く、球場をうずめた大観衆は嶋投手の見事な投球に歓声をあげ応援した。

地元和歌山でも、ラジオ放送にあわせて選手の動きがひと目でわかる大掲示板が和歌山城内の砂の丸広場にたてられ、甲子園に行けない人が集まり、手に汗を握りながらかたずを飲んで九回にわたる攻防を見守っていた。

一、二回は波乱もなく進んだ。三回表に二点を先取した。四回から、両チームは互角の試合を展開、決勝戦にふさわしい熱戦となった。しかし、七回、古角、加茂、嶋の打棒が火を吹き集中安打して二点を追加した。さらに九回表にもだめ押しの一点を加えて、大勢を決定的なものにした。九回の裏最後の守りについた海草中学校ナインは、互いに声をかけ励ましあった。



嶋投手の剛速球は、最終回もいささかの衰えを見せず落差のある得意のカーブが右バッターの内角低めに小気味よく切れ込み、相手の打者につけいるすきを与えなかった。こうして九回裏二死まで相手を追いつめた。いよいよ大詰めである。相手チームも必死の反撃を試みる。あと一人の打者を打ち取れば悲願の優勝である。嶋の胸は高鳴った。しかし、強い彼にも生真面目な性格からくる気の弱さがあった。前年の甲子園大会には第一回戦に平安中学校を5対4とリードしながらも、九回裏突如として制球力を乱し、連続の四球で、押し出しの一点を失い、それがもとでまったく平静さをなくして自滅し逆転された忘れられない無念な思い出が一瞬彼の心をよぎった。

嶋は流れる汗をゆつくりタオルで拭い、「落ちつけ、落ちつけ、この一球に魂をこめて全力投球すれば、勝利の女神は必ず我らにほほえむ。がんばれ！」とわが身に言い聞かせた。しかし、キャッチャーまでの距離がずっと遠く、ミットが小さく見えた。投げる手がブルブルと震え、キャッチャーとのサインもなかなか決まらない。

嶋の耳には、今は大観衆のどよめきも、応援団の声援も聞こえない。じりじりと焼けつくような真夏の太陽の暑さも感じない。

自分の持っている全力を込めて投球する。球は大きく外れ、「ボール！」と審判の声が球場に大きく響いた。

それを見たナインがピッチャーズマウンドに集まってきた。

「あと一人だ。がんばろう」

「いままで練習した成果をいま出そう。目をつぶって投げても日頃の成果が出るよ。」

「がんばれ！」

ナインが口々に励ましながら自分の守備位置に戻って行った。

目をつぶると、ナインの一人ひとりの顔、父母の顔、泣きながら応援してくれている友達、監督の顔、地元で「がんばれ」と声をかけてくれた人の顔が目の前に浮かんだ。

気をしずめ、神様にお祈りする気持ちで、ただキャッチャー田中のミットめがけ気力をふりしぼって剛速球を投げ込んだ。

審判の右手が高々とあがり、

「ストライク・バッター・アウト」一瞬球場がシーン！と静かになり、次にドッ！と言う歓声が上がった。

最後のバッターを三振に打ちとった嶋は、思わず両手を高々とあげて勝利の感動を体であらわし、マウンドに集まってきたナインと抱き合って、優勝の喜びをわかちあった。

